ロクでなし魔術講師と禁忌教典と火拳（ロクアカ×ONE PIECE）

迷子の鴉

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

かつて世界には鬼の血を継いだ子がいた。

これはそんな子の名を受け継ぎ、そっくりな誰かが起こす事件のまとめ書き

現在、凍結中

目　次

プロローグ ―――― 1
1話　自習は昼寝の時間である ―――― 5
2話　魔術って何だ？ ―――― 12
3話　ダメ講師が『魔術』講師に ―――― 23

プロローグ

「……とここまでがゲイル・ブロウの発動過程でこの部分からマナが流れてその魔術が――」
「ムム」
「分かった？」
「全くわからん」
「もーう！」
　アルザーノ帝国魔術学院２年２組。その教室内では生徒達が教師が来るまでの間思い思いの時間を過ごし、その中で１人の男子生徒が金髪の美少女から講義を受け、頭をひねらして唸っていた。
「あぁぁダメだこりゃ!!　やっぱこういう頭を使うのは向いてねぇや」
「ダメだよ！　そんなこと言ってたら！　まだ１年の内容の一部分だよ！」
「んな事言ってもよォ」
「無駄よルミア。こいつに教えることは時間の無駄よ」
　少年に説教する彼女に銀髪の猫耳みたいなカチューシャを着けた女子が口を挟む。
「システィそんなこと言っちゃ」
「いいんだルミア。俺が悪いんだ、お前が庇ってくれることはねぇよ」
「あなたも学院の生徒として自覚を持ちなさい。なんであんたみたいなのがこの学園に来たんだか……」
「ま、そうカリカリすんな。白髪が増えるどころかハゲになるぜ」
「これは白髪じゃなくて生まれつきの銀髪！ハゲにはならない！あんたいい加減にしてよ！何度目よこのやり取り!?」
「みみっちいなぁ。そんなんだから講師泣かせの白猫なんて言われんだ」
「くぅぅぅ!!」
「システィ！　どうどう……！」
　３人によって広げられるやり取りに（あぁまたか）と生徒達は呆れ、

苦笑し、自分の課題に取り組んだ。

「それにしても……遅い！」
「何が？」
「ほら、今日来る臨時講師の先生」
「あ、この前セリカのばぁちゃんが言ってたあれのことか」
《ばぁちゃん!?》
　一同は大陸最強の大魔術師「アルフォネア・セリカ」をばぁちゃん呼びした少年に恐れおののく。
「どっか道迷ってんじゃねぇか」
「この学院に務めることになる講師が時間に遅れるってどういうことよ！」
「ウーン、でもこんなに遅くなるなんて……」
「ま、待ってりゃ来るだろ。やーどんな奴なんだろうな。楽しみだ」
　その時、
「悪ぃ悪ぃ遅れたわ～」
　漸くその講師であろう男が教室に現れた。
「やっと来たわね！　あなた、一体どういうこと!?　あなたにはこの学院の講師としての自覚は――」
　システィーナの体がヒエヒエに凍つく。
「あ、あ……あああ――あなたは――っ!?」
　なんだ運命の再開？　……お知り合いで？
「違います人違いです」
　人違いか。
「人違いなわけないでしょ！　あなたみたいな男、早々いてたまるもんですか！」
「こらこら、お嬢さん。人に指差してはいけませんって習わなかった

かい？」
「そうだぜシスティーナ。大体お前いつもいつも偉そうにおれのこと注意しやがって」
「うるさいあんたは黙って！　ていうかあなた、なんでこんな派手に遅刻してるの!?　あの状況からどうやって遅刻できるっていうの!?」
「そんなもん、遅刻だと思って切羽詰まってた矢先、実は時間にまだ余裕があるってわかってほっとして、ちょっと公園で休んでいたら本格的な居眠りになったからに決まってるだろう？」
「なんか想像以上にダメな理由だった!?」
「ははは！おもしれぇ。俺気に入ったぜあいつ！」
「あはは……エースくんみたいな人が来ちゃった」

「学院長ぉぉー!!」
　誇りある学院長の部屋に頭がちょっとヤバそうな眼鏡の男が入り込む。
「なんだねハーレイ君、そんなに慌てて」
「私の仰りたいこと、あなたには検討がお付でしょう」
　ハーレイの剣幕に学院長、「リック・リオダーン」はため息をつく。
「今日赴任してきたグレン君の事かね」
「それもあります！ですが第一にあのポートガス・エースの除籍の件でのことです！」
「君も飽きないのう。彼は一応入学試験はギリギリのラインで合格しておるのだよ」
「ですがこれ以上奴のような馬鹿者を入れていては我が校の恥！さらに奴が度々起こす事件はもう我々の手で終えるものじゃない！」

ポートガス・エース

学院創設以来、２度目の異例の入学を果たした生徒。

彼は一体この学園で何を起こすのか。彼は何者か。

彼が起こす嵐はまだ始まったばかり……

1話　自習は昼寝の時間である

臨時講師の授業は最悪という感想が全生徒が揃って言うだろう。
まずいきなり初回の授業を『自習』と黒板にデカデカと書き、教壇に腕を組んで居眠りをかく始末。
次の日はシスティーナの怒りにさすがに懲りたのか授業を始めたが口調はグダクダ、その次には教科書のページを破って黒板に貼り付けて、また次の日には黒板に教科書を釘打ちし、最終的には何もしなくなり振り出しに戻った。
これに対し生徒達は早々に諦めをつけ、各々自分達がおももくままに自習を開始していた。

ごく少数だがそんなグレンに未だ教えを乞うと話しかける者もいたが、それをことごとくあしらい、グレンは自分の思うがままに居座り続けた。

一方エースは、
「ガァァァァ……ゴォォォォ……」
「起きてエース君！　赤点課題、今日中に出さないと留年だよ！」
周りにお構い無しで爆睡してた。

彼のいびきが鳴り響いていても周りの級友達は無視を決め込む。
いつもの事だからだ。
無理やり起こそうとしたら、寝ぼけた彼に殴られかねない。
しかしここに割り込み無理やり起こすのが「講師泣かせ」の異名を持つシスティーナなのだが、
「いい加減にしてくださいッ！」
彼女はただ今「ロクでなし魔術講師」ことグレン・レーダスに抗議を行っていた。
「む、だからいい加減にやっているだろう？」
「ふざけないでッ！　子供みたいな屁理屈捏ねて！」

「まぁ、そうカッカすんなよ？　白髪増えるぞ？」
「だ、誰が怒らせていると思っているんですか⁉」
「ほら、そんなに怒るからその歳でもう白髪だらけじゃないか……可哀想に」
「これは白髪じゃなくて銀髪です！本当に哀れむような顔で私を見ないで！ああ、もう！こんなこと、言いたくありませんけど、先生が授業に対する態度を改める気がないと言うなら、こちらにも考えがありますからね⁉」
「フゴッ！」
「ほう？　どんなだ？」
「私はこの学院にそれなりの影響力を持つ魔術の名門フィーベル家の娘です。私がお父様に進言すれば、貴方の進退を決することもできるでしょう」
「え……マジで？」
「グォォォォ……！」
「マジです！　本当はこんな手段に訴えたくありません！　ですが、貴方がこれ以上、授業に対する態度を改めないと言うならば――」
「お父様に期待してますと、よろしくお伝え下さい！」
「ゲップシッ！」
「エースくん起きてっ！」
エースのいびきをＢＧＭにグレンは紳士的な笑顔を浮かべた。
「いやー、よかったよかった！　これで一ヶ月待たずに辞められる！　白髪のお嬢さん、俺のために本当にありがとう！」
「貴方って言う人は――ッ！」
もうシスティーナの忍耐も限界だった。
システィーナには、このグレンという男が本当に講師を辞めたくてそんなことを言ったのか、それともフィーベル家の力を侮っているだけなのかは判断がつかない。
だが、どちらにせよシスティーナはもはや、このグレンという男の素行を看過することはできなかった。魔術の名門として誇り高きフィーベルの名において、魔道と家の誇りを汚す者を許しておくわけ

にはいかない。
何より先程からのエースの無遠慮ないびきのせいで堪忍袋がはち切れそうだった。
この男もそうだがエースも出来るならさっさとこの学園から出ていかせたかった。ルミアが妙にこの男に懐いているのもあるが、魔道の道を汚すことしかしてないエースをシスティーナは許せるはずがなかった。
……だがこの男、見た目に反して実績があることから簡単に追い出せないというのが悩みの種である。
システィーナは左手に嵌めた手袋を外し、それをグレンに向かって投げつけた。
「痛ぇ!?」
手首のスナップをきかせて放たれた手袋は、グレンの顔面に当たって床に落ちる。
「貴方にそれが受けられますか?」
しん、と静まり返る教室の中、システィーナはグレンを指差し、力強く言い放った。
その様子を注視していたクラス中から、徐々にどよめきがうねり始める。
エースは未だうつ伏せて寝ている。
「お前……マジか?」
グレンも眉をひそめ、柄になく真剣な表情で床に落ちた手袋を注視している。
「私は本気です」
グレンを険しくにらみつけるシスティーナの元へ、ルミアが駆け寄った。
「し、システィ! だめ! 早くグレン先生に謝って、手袋を拾って!」

だが、システィーナは動かない。烈火のような視線でグレンを射抜き続ける。
「……お前、何が望みだ？」
その視線を受け、グレンが半眼で静かに問う。
「その野放図な態度を改め、真面目に授業を行ってください」
「……辞表を書け、じゃないのか？」
「もし、貴方が本当に講師を辞めたいなら、そんな要求に意味はありません」
「あっそ、そりゃ残念。だが、お前が俺に要求する以上、俺だってお前になんでも要求していいってこと、失念してねーか？」
「承知の上です」
途端に、グレンが苦虫を噛みつぶしたような、呆れたような表情になる。
「……お前、馬鹿だろ。嫁入り前の生娘が何言ってんだ？　親御さんが泣くぞ？」
「それでも、私は魔術の名門フィーベル家の次期当主として、貴方のような魔術をおとしめる輩を看過することはできません！」
「あ、熱い……熱過ぎるよ、お前……だめだ……溶ける」
グレンはうんざりしたように頭を押さえてよろめいた。
クラス中がハラハラしながら逼迫した二人の動向を見守っている。エース未だ起きず。
「かァァァ…」
グレンはシスティーナを見た。強気に見せてもシスティーナの身体は緊張でこわばっていた。それもそのはずだ。これから行う魔術儀礼の結果次第では、システィーナはグレンに何を要求されても文句は言えないのだから。
だが、それでもシスティーナはグレンに立ち向かったのだ。魔術への信念と、血の誇りにかけて。システィーナ＝フィーベルはこの年齢にして誰よりも何よりも一流の魔術師だったらしい。
「やーれやれ。こんなカビの生えた古臭い儀礼を吹っかけてくる骨董品がいまだに生き残っているなんてな……いいぜ？」

グレンは底意地悪そうに口の端を吊り上げた。床に落ちている手袋を拾い上げ、それを頭上へと放り投げる。
「その決闘、受けてやるよ」
そして、眼前に落ちてくる手袋を横に薙いだ手で格好良くつかみ取ろうとして――失敗。グレンは気まずそうに手袋を拾い直した。
「ただし、流石にお前みたいなガキに怪我させんのは気が引けるんでね。この決闘は【ショック・ボルト】の呪文のみで決着をつけるものとする。それ以外の手段は全面禁止だ。いいな？」
クラス中が固唾を呑む中、グレンはルールを提示する。
「決闘のルールを決めるのは受理側に優先権があります。是非もありません」
「で、だ。俺がお前に勝ったら……そうだな？」
グレンはシスティーナを頭の天辺からつま先まで舐め回すように見つめる。そして、顔を近づけ、にやりと口の端を吊り上げて粗野な笑みを見せた。
「よく見たら、お前、かなりの上玉だな。よーし、俺が勝ったらお前、俺の女になれ」
「――っ！」
その一瞬。ほんの一瞬だけ、システィーナが慄いた。ルミアも息を呑んで青ざめた。エースは少し目を開けつつあった。
こんな要求があるかもしれないことは、システィーナも覚悟していたはずだ。が、それでもいざそんな取り返しのつかない言葉を聞くと思わず弱気が表に出たのだろう。
「わ、わかりました。受けて立ちます」
そんな一瞬の弱気を恥じるかのように気丈に搾り出した言葉もほんの少し震えていた。
グレンはシスティーナが微かな後悔と恐怖を強気の仮面で必死に取り繕い、一生懸命にらみつけてくる様をじっくりと堪能し、突然、腹を抱えて笑い出した。
「だはははッ！　冗談だよ、冗談！　そんな今にも泣きそうな顔すんなって！」

「……っ！」
「ガキにゃ興味ねーよ。だから俺の要求は、俺に対する説教禁止、だ。安心したろ？」
　その言葉をそばで聞いていたルミアは胸をなで下ろし、ほっと息をついた。
「ば、……馬鹿にして!?」
　一方、自分がからかわれていたことを知ったシスティーナは、顔を真っ赤にしてグレンに食ってかかった。
「ほら、さっさと中庭行くぞ？」
　それを適当にいなし、グレンは教室を出て行く。
「ま、待ちなさいよッ！　もう、貴方だけは絶対に許さないんだから！」
　肩を怒らせてシスティーナはグレンの背中を追った。
　クラスの皆も２人の決闘を見ようと教室を出ていった。

「ファァァァ……いったか」
　誰もいなくなった教室でエースはようやく起き上がった。
「決闘がどうとか言ってたな、そっちも気になるがまずは」
　体を伸ばし準備運動を始める。
「最近、あまり動かしてなかったからなぁ。鈍ってなきゃいいんだが」
　ひとしきり伸ばしたあと、教室の窓を開け放ち空へと飛んだ。

そこでなんてことだろう彼の体が火に包まれた。
そのままエースは壁を這い上がり、学園の天辺へと向かった。

2話　魔術って何だ？

全身の筋肉をフル活用し、上へ上へと上がっていくエース。
この間、一切魔術を使っていない。素の力だけで建物を登っているのだ。
そして彼は学院の1番高い屋根の先にたどり着き、体を大きく伸ばした。
「いやぁー風が気持ちいいぃー！」
思い切り息を深く吸い込み、風邪を全身に取り入れる。
てっぺんから見下ろす景色はまぁ素晴らしい。丸い形の街「フェジテ」を一望できるから、エースはこの場所が好きだった。
「お、あれ白猫と先公か？」
見下ろす中、学院の広場で自分のクラスの連中が集まっている。
今から、どうやら決闘をするらしい。
両者互いに距離をとり、システィーナの先攻から始まった。

「あ、ありゃダメだな」
エースは呟いた。
グレンの動きを見れば勝敗が簡単に分かる。
思った通り、詠唱する前に電撃を浴びて倒れた。
どっちが？　グレンが。
「覇気が全く篭ってねぇ。最初から負けるつもりで挑んだな、あの先公」
エースは先程の流れからグレンが決闘の約束を守る気など微塵も

ないと分かった。
あの様子だと最初から真面目に授業を行う気なんて無い。約束も適当にはぐらかして無しにするだろう。
しかしシスティーナは未だ諦めていないらしい。魔術師の血統やら誇りでしているものだから、流石のグレンでも破るわけはないと思っているらしい。
当の本人は魔術師としての誇りなど持ってないだろうが。
かくいうエースも魔術師としての誇りなど持ってない。自分が魔術師と思っていないからだ。

「あ、また始まった。あ、またやられた」

結局。
「いやー粘ったなぁ。まさか４７勝負までネチネチと伸ばすとは（モグモグ）」
どこから取ってきたか、クッキーを頬張りながらエースは少し呆れ感心した。
ねちっこかったがまぁシスティーナ相手にあの手は通じる。
「すみません。無理です。許して下さい。もう立てません。ていうかこれ以上続けるとボク、何かに目覚めちゃいます」
「はぁ……」
システィーナは大の字で痙攣するグレンを見下ろしながら、深いた

め息をついた。
「いやー、【ショック・ボルト】のみでの勝負なんて俺に超滅茶苦茶不利な不公平ルールだからなーッ！　こんなルールじゃなかったら俺が圧倒的に圧勝したんだけどなーッ！」
「先生って本当に口が減りませんね」
「そうだなぁ。あそこまでやられて反論するなんて並大抵のやつじゃ出来ないぜ」
　というか見苦しく見えるから恥ずかしいと思わないのか。
「と、とにかく決闘は私の勝ちです！　だから私の要求通り、先生は明日から――」
「は？　なんのことでしたっけ？」
「え？」
「やっぱりな」
　エースの予想通りだった。あの先生は約束を守るつもりなどなかった。
「魔術師じゃねー奴に魔術師同士のルール持ってこられてもなー、ボク、困っちゃう」
「貴方、一体、何を言ってるの……ッ!?」
「おいおいあんなこと言ったら後がまずいぞ」
「とにかく今日の所は超ぎりぎり紙一重で引き分けということで勘弁しておいてやる！　だが、次はないぞ！　さらばだ！　ふはははははははは――ッ！　ぐはっ！」
「なんなんだよ、あの馬鹿」
　後に残されたのは、しらけきった観客達ばかり。
「まさか【ショック・ボルト】みたいな初等呪文すら一節詠唱できないなんてね」
「ふん、見苦しい人ですわね……」
「魔術師同士の決め事を反故にするなんて最低……」
　誰も彼もがグレンを酷評する中、ルミアは心配そうにシスティーナの隣に歩み寄る。

「大丈夫？　システィ。怪我はない？」
「私は大丈夫……だけど」
システィーナは険しい表情でグレンが走り去った方を見つめていた。
「心底、見損なったわ」
まるで親の敵のようにうめく。
システィーナはこう見えてグレンという男に一応の敬意を払っていた。グレンは先達の魔術師だ。確かに講師としてのやる気はないようだったけど、同じ魔術を志す者として、それでも何か学べるものがあるはずだと思っていたのだ。
だが、もうだめだ。あの男だけは許せなくなった。あの男は魔術を侮辱している。あの男がこの学院にいる限り、自分とあの男は不倶戴天の敵同士だ。（エース同様）
「グレン先生……」
ルミアは激しく憤る親友を前に、途方に暮れるしかなかった。

「……あれ、エースくんは？」
ようやくルミアはエースがいないことに気づいた。

決闘から三日後。
グレンの評価はだだ下がり。生徒の誰もグレンを気にかけるものなどいなくなった。
だが、当のグレンはなんの負い目もないようだ。のんべんだらりと日々をこなしていた。
やがて生徒達はグレンの授業中に、自由に自習をするようになる。元々学習意欲の高い者達ばかりなので、グレンの授業で時間を無駄にしたくないのだ。生徒達は皆、思い思いに魔術の教科書を広げ、思い思いに勉強に励んでいる。
そんな生徒達の様子を見て、グレンも何一つ文句は言わない。いつの間にかそれがグレンと生徒達との間での暗黙の了解になっていた。
「ガァァァァァァ……」
「エースくん起きて！　今日は意地悪な問題ばかりのハーレイ先生の赤点課題を出さなきゃ、留年しちゃうよ！」
「……俺が言うのもなんだけどよく寝てられるなあいつ」
今日も今日とてエースは寝ていた。

「あ、あの……先生。今の説明に対して質問があるんですけど……」
授業開始から三十分ほど経過した頃、おずおずと手を上げる小柄な女学生がいた。初日の授業でグレンに質問し、あっさりあしらわれてしまった少女――リンだ。
皆がグレンを軽蔑、ないがしろにしても彼女はそれでもグレンに教えをこうとしていた。
「あー、なんだ？　言ってみ？」
「え、えっと……その……今、先生が触れた呪文の訳がよくわからなくて……」
するとグレンは、面倒臭そうにため息をついて、教卓の上に置いてあった本を一冊拾い上げた。
「これ、ルーン語辞書な」

「……え？」
「三級までのルーン語が音階順に並んでるぞ。ちなみに音階順ってのは……」
グレンがルーン語辞書の引き方を解説し始めた時、グレンに関してはもう無関心を決め込むつもりだったシスティーナも流石に黙っていられなくなり、立ち上がる。
「無駄よ、リン。その男に何を聞いたって無駄だわ」
「あ、システィ」
質問をしたリンは、グレンとシスティーナに挟まれて所在なさげにおろおろする。
「その男は魔術の崇高さを何一つ理解していないわ。むしろ馬鹿にしてる。そんな男に教えてもらえることなんてない」
「で、でも……」
「大丈夫よ、私が教えてあげるから。一緒に頑張りましょう？　あんな男は放っておいていつか一緒に偉大なる魔術の深奥に至りましょう？」
システィーナがうろたえるリンを安心させるように、笑いかけたその時だ。
一体、何がその男の心の琴線に触れたのか。
「魔術って……そんなに偉大で崇高なもんかね？」
ぼそりと、グレンが誰へともなくこぼしていた。
それを聞き流せるシスティーナではない。
「ふん。何を言うかと思えば。偉大で崇高なものに決まっているでしょう？　もっとも、貴方のような人には理解できないでしょうけど」
鼻で笑い、刺々しい物言いでばっさりとシスティーナは切り捨てた。
普段の怠惰で無気力なグレンならば、「ふーん、そんなものかね？」などとぼやいてこの話は終ったはずだ。だが――
「何が偉大でどこが崇高なんだ？」
その日はなぜか食い下がり、エースも口を揃えていた。

「……え？」
想定外の反応にシスティーナは戸惑う。
何故、エースも口を揃えてこの話題に口を挟む？
「魔術ってのは何が偉大でどこが崇高なんだ？　それを聞いている」
「火や雷、撃つくらいだからなぁ」
「そ、それは……」
即答できない自分にシスティーナは苛立った。
なにより普段無意識に見下しているエースに即答できないなんて。
確かに魔術は偉大だ崇高だとは周りを取り巻く人間がそう連呼するから、そういうものだと認識していた節もある。
「ほら。知ってるなら教えてくれ」
だが、決してそれだけでもない。呼吸を置いて言葉をまとめ、自信をもって返答する。
「魔術はこの世界の真理を追究する学問よ」
「……ほう？」
「この世界の起源、この世界の構造、この世界を支配する法則。魔術はそれらを解き明かし、自分と世界がなんのために存在するのかという永遠の疑問に答えを導き出し、そして、人がより高次元の存在へと到る道を探す手段なの。それは、言わば神に近づく行為。だからこそ、魔術は偉大で崇高な物なのよ」
自分では改心の返答だとシスティーナは思っていた。
だから、返ってきたグレンの言葉は不意討ちだった。
「で？」
「……なんの役に立つんだ？　それ」
「え？」
「いや、だから。世界の秘密を解き明かした所でそれが一体なんの役に立つんだ？」
「だ、だから言っているでしょう!?　より高次元の人間に近づくために……」
「より高次元の人間ってなんなんだよ？　神様か？」
「……それは」

即答できない悔しさにシスティーナは打ち震えていた。
そんなシスティーナに、グレンはつまらなさそうに追い討ちをかける。
「そもそも、魔術って人にどんな恩恵をもたらすんだ？　例えば医術は病から人を救うよな？　冶金技術は人に鉄をもたらした。農耕技術がなけりゃ人は飢えて死んでいただろうし、建築術のおかげで人は快適に暮らせる。この世界で術と名付けられた物は大体人の役に立つが、魔術だけはなんの役にも立ってないのは俺の気のせいか？」
グレンの言うことはある意味真実だ。魔術を使うことができ、魔術の恩恵を受けられるのは魔術師だけだ。魔術師でない者は魔術を使えないし、魔術の恩恵は受けられない。まるで当たり前のことだが、魔術が人の役に立てない最大の理由だ。魔術は冶金技術や農耕技術のように、その行使が直接的に広く人の益となる性質の技術ではないのである。
そもそも、魔術は秘匿されるべきものだという思想が、大多数の魔術師達の共通認識であり、魔術の研究成果が一般人に還元されることを頑として妨げている。ゆえに今でも魔術は多くの人々にとっては不気味で恐ろしい悪魔の力であり、普通に生きていく分には見ることも触れることもない代物だ。
そう、事実として魔術は人々に直接役に立っているとは言えない。魔術を一般人の俗物極まりない視点で切り捨てた意見ではあるが、それは厳然たる事実だった。
「魔術は……人の役に立つとか、立たないとかそんな次元の低い話じゃないわ。人と世界の本当の意味を探し求める……」
「でも、なんの役にも立たないなら実際、ただの趣味だろ。苦にならない徒労、他者に還元できない自己満足。魔術ってのは要するに単なる娯楽の一種ってわけだ。違うか？」
システィーナは歯噛みするしかなかった。どうしてこの程度の俗物的な意見すら切り返せないのか。圧倒的に言い負かされてしまっているのか。
誇り高きフィーベル家の次期当主として、魔術に全てを捧げてきた

これまでの人生を真っ向から否定されているというのに、何をどうやってもこのグレンという男の言を崩せそうにない。一応、この男は一つの堅い事実の上に論陣を張っているからだ。
あまりもの悔しさにシスティーナが唇を震わせていると……
「低次元か。そこまで言うならお前はそれなりの覚悟を持って口に出しているんだよな」
「……え」
今まであまり口を開いていなかったエースが突如饒舌になっていく。
「なぁお前が使っている鉛筆や本は誰が作った？　いつも食べている食いもんの材料はどこから来た？」
「な、何を言って」
「この学院を作ったのは誰だ。そのレンガを作ったのは誰だ。その窓を作ったのは誰だ」
「何を言ってるのそんなの……」
なぜだか嫌な予感しかしない。しかし問われているのなら答えねば。
「人だ。正確にいやぁ、魔術師。じゃない方だ」
……!?
なんとなく言おうとしていることがわかってきた。
「俺たちは生きるために人に生かされている。それも魔術師じゃない人間に」
「あいつらは俺たちのために食い物作って、税金払って、建物を建てて、べんきょうする場所を作ってくれてる」
「なんでそんなに優しくしてくれんだ？　決まってる。それがいつか報われるって信じてるからだ」
「近頃また急に騒ぎ始めた外道共の事件。それを終わらせてくれると信じているから」
「不作の時に魔術で救ってくれると信じているから」

「身勝手に奪われた土地を取り戻してくれると信じているから」
「だから俺達は生かされている」
「こんな訳の分からない力で自分たちに襲いかかる奴もいる魔術師を」
「『化け物』みたいな俺たちを生かしてくれてる」
「けど俺達はあいつらに何をしてやれた？」
「俺達があいつらにやっていることは」
「ただの穀潰しと……暴力だ」
言葉の羅列に誰も口を挟めなかった。
魔術が人の役に立てていない以上、そういう目で見られるのは仕方ない。先程のグレンの意見がそうであるように魔術師は基本疎まれる存在だろう。
そんな存在が公にされているのもこの帝国の主戦力が魔術師団で構成されているのもある。
「そんなの、あなたの俗物的な極論じゃない！」
しかし黙って認めるシスティーナではない。誇りある魔術師として穀潰しなど暴力を振るう存在と呼ばれたままで言い訳がない。
しかし、
「じゃあお前はさっきまでのことを町のやつらにでかい声で言えるか？　お前に魔術師じゃないヤツらのことを低次元と罵る覚悟は、あるか？」
「命を賭ける覚悟、あるか？」
「え……え？」
エースが何を言いたいかわからなくなってきた。穀潰しといい魔術は何かと教えろと言い、意味がわからなくなってくる。
「お前には覚悟がない。お前が言った低次元とかいうことを毎日必死なって金を手にする街の奴らが聞いたりしたらどうなる」
「それは……」
「みんなお前を見限る。こいつは俺たちを助けちゃくれない。俺たちを馬鹿にした。許せない。と思うだろうな」
「そ、れは…」

「そうなったらこの街がお前の敵だ。お前は人を傷つけてでも生きる覚悟があるか？　大勢の人間相手に『私はすごい。あんた達は低俗。だから従え』。っていう覚悟があるか？」
「そんなの……！」
「お前先公との喧嘩の時、決闘だって挑んだよな。別にお前が誰のことが気に入らないだろうが最後に一言」
　そしてエースはシスティーナをこの場にいる魔術師達を静かに睨みつけ、怒の表情を浮かべる。

「自分の全てを、命を賭けられない奴が、決闘とか誇りとか軽々しく言ってんじゃねぇ……!!」
ドンッ!!

　彼の気迫、怒りの声にシスティーナもその他のものも誰も何も言えなかった。

3話　ダメ講師が『魔術』講師に

「昨日は……まぁ、すまんかった」
　翌日、何があったかダメ講師グレンが白猫システィーナに頭を下げ謝罪した。
「まぁ、オレの方が悪かったていうか少し一方的に言い過ぎたし」
　頭をガリガリ掻きながら面目ないようすでシスティーナと向き合う。
「何だ？　なんかあったのか」
「昨日、エースくんが帰ったあとに色々あったんだよ」
　エースの疑問にルミアが答える。
「あの後、先生がシスティと喧嘩してね。魔術は人殺しの道具だって言うから、システィが怒って出て行っちゃってね。その後色々あって私からシスティに謝って下さいってお願いしたの」
「フーン」
「さぁて長らくお待たせしました俺の授業ってことですが、これが今使ってる教材か……」
　教科書をパラパラめくり次第に顔を顰めていく。そして、教科書を閉じ窓を開け、
「そーい」
　ポーンッ
　教科書を投げ捨てた。

『え――!!!』
　グレンの奇行に生徒達は目を疑う。
　大事な教材を捨てるとは何事か。
「最初に言っておく」
　ニヤつきながら口を開く。
「お前らってほんとアホだな」
「そうだなぁ」

『否定しろよ！　認めんなよ！』
　エースの声にみんな口を揃える。

「とここまでが『ショック・ボルト』の基礎構造だ。分からないやついるか～」
　ダメ講師グレン覚醒。その噂は瞬く間に学院中に広がった。
「グォォォォ……」
「聞けや！」
　エースは相変わらずいびきをかいて居眠りをしていた。
「ったくこいつは俺が来た時からこうなんだな」
「あはは…すいません。先生が来る前からいつもこうで、システィでも諦めちゃったので」
　呆れた目線でエースを見つめる。
「なぁ、こいつどうやって学院に入学したんだ？　試験なんて受かりそうにないだろう」
　グレンの疑問にカッシュが答える。
「ああそういや前に聞いた時は『特別枠で来た』て言っていたような」
「特別枠？　そんなものこの学院にあったか？」
「いやー聞いたことないっすけど」
　一同共に首をかしげる。誰も聞いたことがない措置だったようだ。

「とにかくだ。もう授業は終わったから消すぞー」
　グレンが黒板に書かれた解説をクリーナーでゴシゴシ消していく。
「ああ！ちょっと待ってください先生！まだ書き終えて」
（キラーン）
「おりゃおりゃおりゃ――‼」
　システィーナの願いもむなしく、グレンは勢いよく消していく。
「あああ！ちょっと先生！まだ書き切れていないのに！」
「だはははは！どうだ白猫！もう半分消えたぞー！」
「子供ですか！あと、白猫じゃなくてシスティーナです！」

ダメ講師の授業はこんな感じで賑やかに騒がしくなっていった。

寝ているエースの口は少しだけ笑っているように見えた。

「では予定通り後日ということで」

「ああ」

「了解。へへへ」

フェジテの町はずれ。

暗がりの場所で四人の男たちが会合していた。